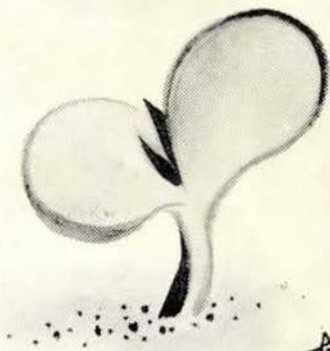
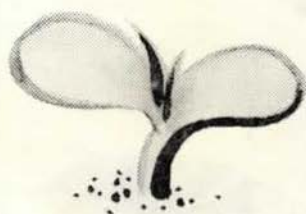
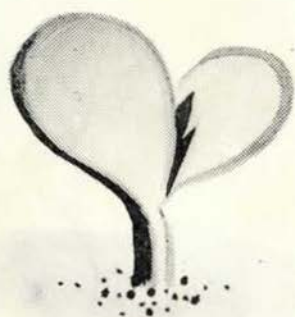


土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌) 第三五二号
昭和四十六年四月二十五日印刷 和四十六年五月一日発行



達

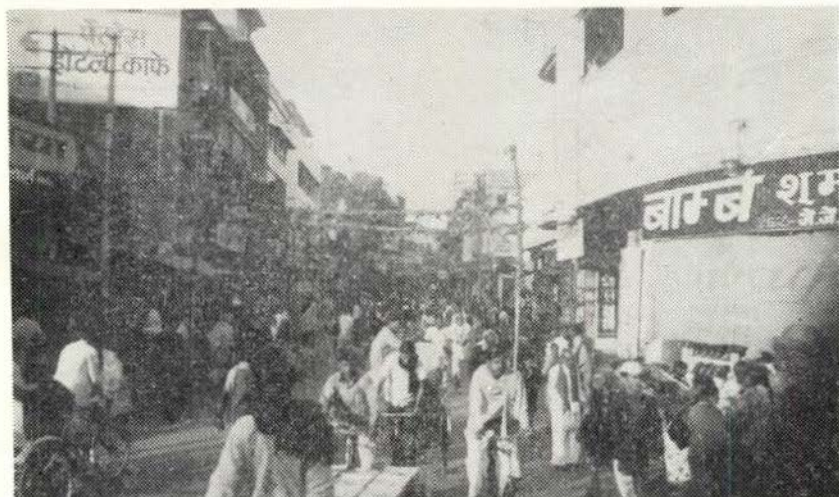
第三十七卷

第五号

1971

5

五 月 号



目 次

表紙「苗」松涛達文画

自他法界同利益	鷹 司 誓 玉	(2)
椎尾弁匡大僧正を偲んで		(4)
若き日の父 = 追憶断片 =	椎 尾 弁 章	
学人椎尾先生を偲ぶ	佐 藤 密 雄	
師表を浄土に	藤 井 実 応	
芳躰を慕いて	佐 藤 良 智	
共生のおしえに導びかれて	磯 部 常 治	
昭和法然上人伝(5) 阿波介と耳四郎の発心・大原談義		(12)
浄土歳時記① さつき	若 林 隆 光	(14)
インドでの旅日記(10)	佐 藤 治 子	(16)
「道」法然堂への道	高 橋 良 和	(22)
「特集」青年と仏教〈第一回〉		
法然上人の目指された人間像	香 川 孝 雄	(24)
諸調査からみての現代の青年層を考える	恩 田 大 進	(27)
浄土宗の古刹をたずねて		(33)

語和声念



= 世界仏教会議 =

五月十三日を中心に五日間、セイロンで第十六回世界仏教会議が開かれる。日本からは大谷光照さんを団長にして、僧侶と信者とが五十余人参加する。中国や日本の仏教では、釈尊の誕生は四月八日、入滅は二月十五日、お悟りは十二月八日とされ、夫々の日に花祭・ねはん会・成道会の催しをするが、セイロン等の仏教諸国では、釈尊の誕生も入滅もお悟りもすべて五月の満月の日であったとして、この日を中心に一ヶ月間を五月祭とする。村々町々に仏陀に關係した飾物をなして、仏教の出現を祝うのであって、大衆歓楽の月でもある。日本でも近頃はウエサカ仏陀祭が行われるが、仏教を国教とするセイロンが、この聖なる月に仏教会議を持つのは尤もなことといえる。

會議に参加する日本仏教の世話役は僧侶であつて、これが會議中の諸事の折衝に當るが、セイロン等では、會議を持つことを命ずるのは出家の長老であるが、會議の計画進行運営はすべて、信者の仏教会が行う。彼の仏教会は信者の集団である。出家は最高の指令と求められた時に出席し発言すればよい。布教や拡大運動は、いわば俗事で修行専念の出家はタッチしない。運動から求められた時に説教する。この点が日本と異なるところで、世界大会にあつても、会の有り方について話合うのは日本側は僧侶で、他の国は大臣級の信者ということになる。このようなところに、彼等が日本の僧侶を出家とせず、在家信者と見る理由の一つがある。これは国情の異りによるもので、生活上の一切が無料で、社会的に優先待遇される彼国の出家は、布教拡大を計画し、且つ普通社会人と同じ経済条件で生活する日本僧侶の有り方とは全く異なる。

南方仏教国の人々から見ると、大方の日本の僧侶は信者の中の専従者である。仏教の布教と儀式に専従する人々ということになる。そこに僧俗一如の良さもある。但し専従者であれば、そこに典型的な仏教者の生き方がある。セイロン信者の中から有名な大菩提会が生れている。この際に日本仏教も心がまえについて一考せねばなるまい。

(佐藤密雄)

鷹 司 誓 玉

青葉若葉のかぐわしい五月となりました。自然の運行はふしぎなもので何事も一方にのみ偏る事なく、寒さが極点に達したと思えばいつしかだんだんと暖かくなり、暑さがきびしくなつて、もう耐え切れないと思う頃には涼風が吹き出して次第に寒い冬が訪れます。四季折々にはそれぞれの美しさのしさがあって、殊に四季の変化のはっきりしている日本に生をうけた私共は、環境にめぐまれ豊かな感受性や高度な精神文化の伝統をうけついでおります。

ゴールデンウィークは一年中で最高の好季節でもあり楽しみにしていらつしやる方も多いでしょうが、折角の飛び石連休を無意味に遊び回り、あるいはゴロゴロと寝てくらす単なる休日にと終らせては勿体ないと思います。五月三日の憲法記念日は過去における軍事力による他国への侵略や多くの人命を失った国家的誤りを、再びくり返さぬために戦争放棄を誓った新憲法の意義を深く思い返し、今後とも平和に貢献しようとの決意を固める日としたいものであります。また五日の子供の日は元来「端午の節句」といって鯉幟を立てたり、甲冑刀剣類をかざり菖蒲の葉を軒にさして邪気をはらい、健康と輝やかしい将来を祈念する希望にみちた男の子のお祝いの日でありました。このような本義を忘れてはいくら大きな鯉幟や豪華なよろいかぶとを飾り立てたとしても形だけの虚飾におわってしまいます。未来の世界を背負って立つ子供達に立派な情操を、言いかえれば精神的バックボーンを身につけて行くように導くことが我々仏教徒のつとめでありましょう。

それは格別むずかしいことではなく、日常生活の場においてお互いに助け合い拌み合うやさしさや謙虚な態度をもつ事が肝心であろうと思われれます。海や山に家族づれて遊びに行った場合でもお弁当がらやジュースのあき缶果物の皮などその場に放りすてしまわず、きちんとまとめてもって帰るとか、焼却出来るものは焼きすて土の中に埋めて帰るとかすれば自分も気

自他法界同利益

持ちよく、行った先の観光地にも迷惑をかけず、又あとから来る人たちに不快感を与えずにすみます。「自他法界同利益」と申せましょう。子供の頃からこういう責任ある態度をもって育った人々が青壮年層となる頃には世の中も少しは住みよくなる事であります。

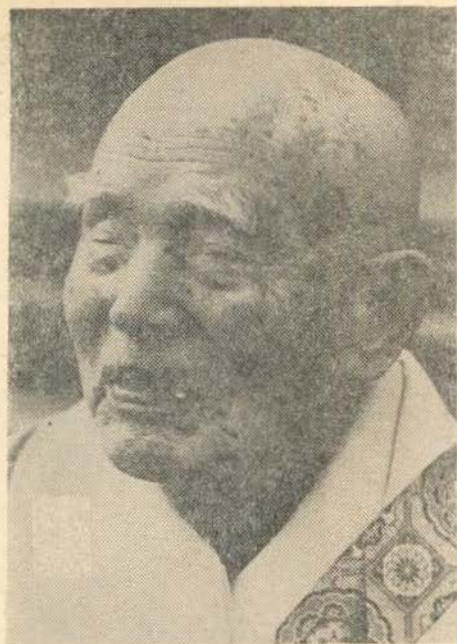
現在の日本は国民総生産世界第二位と言われる程経済的には成長をとげましたが、禍福はあざなえる縄のごとしとやら、繁栄のうらにはさまざまなひずみ欠陥があります。極度に発達した交通網の中では毎日沢山の事故犠牲者が続出し、騒音や排気ガスやスモッグにむしばまれております。老いも若きもレジャーレジャーのよび声にうかれ温泉だ海だ山だと歩きまわって環境を破壊し、消費は美德だとばかりに物を買ひあさり捨て散らし、日々何万トンものゴミの山をつくり出してはヘドロだカドミニウムだとさわぎ立てております。これでは本当の繁栄とは申せません。しかし公害の責任は決して政府だけの問題ではなく私共一人一人の責任として考え少しづつでも改善への努力を積み重ねて参らねばなりません。先のゴミ処理のようによく身近かな事から出来るだけのこととしては行きたいものであります。責任というと義務だの権利だのと冷たい法律論を連想しがちであります。社会生活を営む根本にすみませんという反省懺悔と、勿体ないありがたいとございますとの感謝歡喜の心をもとうという事に他なりません。

「人の心はおおく悪縁によりてあしき心のおこるなり、されば悪縁を去り善縁にちかづけといへり」(十二箇問答)

心清ければ国土も亦清しとも言われております。こんな私でも日々無事に生かさせて頂き申しわけないと反省し、ありがたいと感謝の中に生きる時、せめて私に出来るだけの事はさせて頂こうという報恩奉仕の気持ちも自然にわき上ります。助け合い拌み合って行く所に、明るい清らかなお浄土のような世界が作られて行くことであります。

椎尾弁匡大僧正を偲ぶ

桜の花がひらひらと舞いおち、一片が花み堂の誕生仏にふりかかり、御忌会の鐘の音、響きわたる四月七日、宗祖上人生誕の日に、椎尾大僧正は安らかに往生浄土の素懷を遂げられた。一世紀に亘るご生涯の足跡は、のちの世の人びとの心に灯となってつたえられるであらう。在りし日の面影を偲んで、謹しんで哀悼の意をささげたい。



若き日の父——追憶断片——

椎尾 弁章

(東京港区清林寺住職)

老父九十六歳で転帰し密葬を終る。一世紀に近い生涯を憶い感無量なる今、何か「憶い出」を書いて欲しいと前田内侍長さんからの伝言があり、再三の辞退を申したが、たつてのことなので拙文お許し願います。

僕は六人の男子兄弟のうち五人既に亡く、在世の三男です。増上寺に入山してからの父についてはよく御存知の方々

です。で、若き日の家庭人としての父弁匡の一端を誌します。

大正十年頃から昭和十一年の頃とお考え下さい。晋成のみは頑健でしたが、僕をはじめとしてほかの兄弟妹は病弱のひ弱な子供達でした。当時流行したスペイン風邪から子供達を守るために、発熱などの異常を認めると、決して医院または病院などの外来診療を受けることを禁じ、「他の患者から病気を背負ってくる」と必ず自宅に医師の来診を求めるよう、自ら家人に命令していたのを憶い出す。これと同様の意味で、多数の人の集る浴場などへ行くことは「もってのほか」とのこと、脱衣場などで「病気をしょってくる」からと差し止められていた。ある日、近所の友達の子供達が楽しそうに連れだって浴場へ行くのが羨しく、当時の家の手伝いの者から金を貰い、晋成と二人でそと風呂屋へ行き、友達と楽しく遊んで帰宅したところ、既にバレーでいて、夕方父の前に正座させられてジュンジュンと叱られたのも、ついこの間のような気がする。

それから二十数年の歳月が経ち、僕が厚生衛生行政にタッチするようになって知った、病院内感染とか第二次感染とかが叫ばれ、この対策が予防医学の発達時代となり、これらの心配がない社会となって来ているが、父の先見の明を思

い、増上寺で盲目に近い祖父の顔を見つめながら、当時の環境衛生の悪い最中、兄弟達を守ってくれた父を憶い、感謝の涙が流れたのを思い出す。

それから成人して僕が二十一・二歳の頃、初めて僕の洋画が上野の展覧会に入選したので、朝食の席で父に喜びを話した。「フンフン」と聞いてくれた。その時父が一高試験科目の中に図画があり、赤ん坊の顔を鉛筆で書く問題が出たが、下手でいくら修正しても老人の顔になってしまい、「この課目の出来方ではとうてい入学できない」と独りで悩み、発表の日は見に行くまいと決めていた。ところが「椎尾君合格してるぞ」の、発表日に友人が大声で教えてくれたので、半信半疑で飛んで行くと「合格だっただよ」と笑いながら話してくれた。

僕の入選画は開会間もなく売約済の赤紙がはられた。僕は有頂天で、父にも友人達にも話した。父は「よかったなあ」の喜びの表情だった。当時は、絵画などは売れる時代ではない。会期中は購入者の氏名は知らされない頃である。会期終了、作品引取と購入者氏名を見て「アッ」と驚いた。椎尾弁匡と書いてあった。当時父は国会に議席も有し、三つの大学と講演会と、多忙の毎日だった。早速父に連絡がとれ、父に逢いたいと申し入れた。父は笑い声で「教寄屋橋のニューグ

ランドで逢おう」と返事が返ってきた。その晩、ほかの弟妹達と共に楽しい一席の歡をつくした。

よき時代の若き日の父の姿である。よき父だった。当時の僕も数年で還暦。いろいろ書きたいが字数制限なので、また別の日に書いてみたいと思います。

学人椎尾先生を偲ぶ

佐藤 密雄

(元大正大学学長)

大正年代のことである。仏教学界の新進は東大の木村泰賢、東北大の宇井伯寿の両教授であった。特に木村教授の学位論文「阿毘達磨論の研究」が出版されると、学界は挙げて先人未だの研究として讀めた。内容は俱舍論の成立に関するものであった。然し、その書の巻頭に序文に次で「公刊に際して追記」の一文があった。

この論起草の当時、著者は日本刊行の参考書を使用するに不便であった結果、この方面に於ける材料使用の点に於て、遺漏の點からざることを発見した。殊に雑誌「宗教界」

に椎尾博士の「六足論の研究」掲載ありしに気づかず、今く之を参照し得ざりしは著者の最も遺憾とする所である。木村博士より十数年先きに、同博士よりも広く南北阿毘達磨を比較し俱舍論に及ぶ研究が椎尾先生によって完成され、その一部が、宗教大学の機関誌「宗教界」に発表されてあったことに對するものである。

椎尾先生は先きに宗教大学を終え、更に明治三十八年東大を卒えて、宗教大学の教授になり早稲田大学に出講された。後年、昭和八年に私と佐藤良智君とが共訳して「論事附覚音註」を出版した際、先生に乞うて十一頁に及ぶ解説的序を頂いた。南伝阿毘達磨研究の貴重な文献となるものであるが、その中に前記木村博士の研究についての一節がある。

明治末葉に早稲田大学や宗教大学に七論の大意を講説せる頃、北方阿毘曇との比較を試み、その一部を六足論の成立考として宗教界に連載せしが、一般の研究に遠くして読者を裨益することが出来ぬと云われるので続稿を見合せた時代を回想すると、真に隔世の感がある。その後大正となり、木村泰賢君は阿毘達磨の發達として俱舍成立に関する研究業績を発表されたが南方諸論に未到の地域が残された。昭和五年……論事の大切なことを痛説されたが健康勝れず……永眠されたことは同君のため学界のために恨事

であつた。

これを読むと先生は明治・大正・昭和にわたつて活動され、その間に、木村博士以下幾人もの学者が世に出て夫々の功績を残して世を去つた。今にして考えれば、夫々の学人達の研究の偉大にもかかわらず、なお椎尾先生の一冊の「仏教哲学」を拡充し得るものでなかつた。

計に接して、私は仏教哲学を読むこと数日に及んだが、正確に文献を跡づけ理解せんとしても筆者の生涯を尽すも果し得ざるところであり、ましてこれを拡充することは不可能に近い。学ぶことを怠つたというより、大海の水は測り難い感である。恩師の霊前に不敏を詫る外はない。

師表を浄土に

藤井 実 応

(愛知岡崎大樹寺貫主)

昭和四十六年四月七日に、わが恩師、われらの師表は浄土に還りたまつた。万感交々、ただ念仏、言うことばを知らぬが現在の心境である。

大正十二年六月、第一回の共生結衆が、鎌倉の光明寺に於て開かれた時、一学生として参加、仏教とはこんなに明るく力強く生きゆく道であつたかと気づかされ、導かれた。それよりこの方、今日に至るまで、半世紀にわたつての愚篤なる御指導を受け、今日の私あるは全く師表よりの賜、限りなき広大の慈恩、謝しても謝しても謝しがたきことである。

第一回の共生結衆の感激は、その翌年四月宗教大学明照学舎にて学生の共生結衆を主催し、また卒業後、長野県紫雲寺住職の時、師表を招請して結衆を開くこともなつた。大正十四年、石巻西光寺（樋口隆昇師）の共生結衆に師表の同伴をして結衆の司会をしたことを最初として、以後十余年、結衆には伊藤宏天師と交代に、その司会役をつとめ、師表に随伴して、御指導を頂くことを得、南は九州、北は北海道、西は朝鮮にまで同伴することができた。その間、御講演をとおしてそのみ教を頂くことができたが、特に同伴をして、その身を以て示される共生の実践の御生活に親しく接することができ、生きた大教訓を得たことは、まことに百千万劫にもあいあふことかたき共生、真生の人格をとおしての、み法にあうたよろこびである。

師表私共、共生同人は椎尾弁匡大僧正とか、椎尾博士とか、ごぜんさまとか申上げる場合もあるが、多くは師表と申

してお敬いし、お慕いしているのも師表と申上げるのが、一番親しい呼び名となっている。師表に随伴し共生の集いの司会、助講をつとめたのは、大正十四年より十余年が最も多く師表の五十代の頃である。

師表は仏教学宗教学等、深を尽し、奥を窮めて、その權威であられたことは、仏教学界、宗教学界のひとしく認めていることである。それら専門の学のみならず、科学、哲学、倫理、経済、教育等学問百般、古今東西にわたって研められた。単に学問にとどまらず、その結晶が「共生き」教化活動となられたものと思う。その共生精神を以て宗教、教育、政治、経済、社会の實際浄化に生涯をささげつくされたのである。寸陰も空しく過さることなく、一切の時、一切の処、悉く菩薩行、不斷精進の御生活であった。夜行で朝、会場に着すると早々講演がはじまる。一日中何回も講演されて、又夜行で次の会場に赴かれることも屢々あった。その講演も時間ぎりぎり迄熱心になされ、汽車に飛び乗るような場合もあった。経にある常精進菩薩とは師表のことであると誰しも崇めたことで、まことに驚歎すべき大活動大精進の御生活、どうしてそのような超人的と申すほかなき働きがなし得らるのであるか。私はお伴をして、その御活動を眼にしながらかえるのであった。それは「共生」の信念の発露というより

ほかはないが、第一、健康体であられたからだと思われる。実に姿勢の正しい、均斉のとれた柔軟なおからだであった。お風呂にも一処に入り、お灸をすえておられた頃、私も背中などお灸の手伝いをしたので、その色の白く、柔かであったことが忘れられない。握手をすると、温かく、柔かで女性の手のような感じをうけたものである。阿弥陀仏の光明に遇うものは身も意も柔軟になると経に説かれてあるが、師表の柔軟な身心は常に仏光照耀裡に消息されたからであろう。

次に「共生」のみ教の如く、その時のその事に全力つくして、次々と仕事を進めゆかれる、これがあの常精進の生活がなしえらるる因であると思われる。講話の時には、それに全力尽して熱誠こめて話される。終つて休みの時間となり、講師の控え間にゆかれると、すぐ手紙なり、原稿を書かれる。来客があれば、その原稿はそのままにして来客と一心にお話をなされ、客が去られると、すぐまた原稿に、時間がくればまた次の講話に移られる。かくて如来にまかせきつた安らかさの中に、充実した一日が暮れる。数人以上の仕事をおえて、いよいよ就眠せられる時になると、横に臥せられたかと思うと、早やかすかないびきが聞こえるほど、すぐに眠りに就かれるのである。朝眼がさめるとサッと起床される。生きた念仏三昧の境地であられたと思う。私はかような師表の生

活をとおしてみ教えを伝えられたことを、かぎりないよろこびとし、ただ自らの至らなさを懺謝し師の次のお歌を座右の銘としつとめてゐる。

時は今ところあしもとその事に

うちこむいのちとはのみのち

(師表の思ひ出は次々とわいてくるが、次の機会にゆずり)

師表浄土に在して、われらを導きたもうを信じ、その還相回向に合掌したてまつる。

芳躅を慕いて

佐藤 良智

(大正大学事務局長)

大本山である東京芝増上寺の椎尾大僧正は、四月七日九十六歳の御高齡をもつて御西化されました。上人は明治六年に名古屋にお生れになり、大正・昭和と文字通り上人として、この尊い御生涯を完了されました。この御伝記を述べればかぎりなく、一巻の書としても大部のものになりましょう。御著書の御全集、御伝記等の出版は、いずれ近く私共にあります。

たく接することができましょう。

先生は学者としても、経世者としても、宗教者としても明治・大正・昭和を通じて、文字通り第一人者でいらせられた。浄土宗の最高学府を了えられ、改めて第一高等学校・東京帝大にすすまれ、当時の最高の名譽であった銀時計の拝受者であったことでも、このすぐれた学才を持たれたことを知ることができぬ。

お若い頃の仏教書の研究の中に、今日においても学問的価値が高く評価されている「六足論の研究」などは、発表になつても当時誰も理解するものがなく、続けて発表されることを中止されたことをうけ承ったことがある位であります。御著書でも「仏教哲学」等一代の御名著として、後世に残るものが数多くあります。

経世家として衆議院に出られ、戦時中に涉り精神作興議員として、天下にその名をひびかせたこともあります。精神的に実に砂漠の観のあった、当時の日本人にとって慈雨の観があったことです。学者として第一人者であり、教育者としては大正大学の学長を三期も懇請され、おつとめになつておられます。

大僧正の最も力をそがれたのは信仰運動であります。その御主張の「共生」の御信仰は、その日夜をわかつた日本全

国への御足跡、御著述によって、かぎりない人々の心にともしびをおとぼしになり、この灯はこれからも永劫に続いてゆくことでしよう。

こゝろいきみ（身）いきこと（事）いきもの（物）いき人みないきる共いきの人に。

時は今ところ足もとその事にうちこむいのちとはのみのち。

この二首を拝読しても「共生」の意が、おぼろながらも理解することができる。その御主張の評価は、やがて接する御著書にみることにしよう。

まことに「巨星おつ」の感がありますが、その御人格とみ教えは、永久に語り伝えられ、ひとびとの心の灯となって消えさることがないでしょう。ここからつつしみ、お悼み申しあげます。

共生のおしえに導かれて

磯部 常治

（東京共生会会員・弁護士）

世は無常、桜花瀾漫春風にさそわれて、去る四月七日、芝増上寺大僧正椎尾弁匡法主は九十六歳の齡を重ねられて御遷化、大往生を遂げられた。このことはめでたくもあり、また世をあげて惜しみても悲しみの極みであります。真魂こめて謹んで哀悼の詞を表します。

降って単座し謹んで慕えば、私は大正十五年弁護士としてその業務にたずさわるに、民事刑事の件を、いずれにせよ法律論による裁判では、本当の解決を与えることの不可能なるを悩むこと、多きを痛感した。この解決には法の何たるやの探求の要を想い、哲学に宗教にと、碩学者を訪問して歩くうち、昭和十五年春頃、芝増上寺の大門をくぐり椎尾大僧正に、初めて会見を求めたのでした。

そして快く御会見下され、対談のうちに私の「法とは何ぞや」の質問に、法主は「生きることだ」、生きることとはとの質問に「生かすことだ」と、以下約二十分間法の御説法をうけたのです。尚不可解のことあらば日曜講演に來られよ、との御教示に接することを得た。

爾來、私はこれまでいづれの学者や法主にも、皆門前払いをされて会見さえ得られなかったが、椎尾大僧正に真心より迎えられる、法の御説法、しかも「法とは生き生かすことだ」「共生だ、ともいきだ」との御言葉に、いい知れぬ法悦

を感じた。そして私は毎日曜講演に出席して多くの質問を重ねるうちに、何時か門下生として親しみ（しかも我家は浄土宗であった）、あるいは縁山会に、また共生会にと入会して、約三十年間の今日まで、誠にありがたい御法話に接することができた。

そこで私は何とかして一字一句でもよいから、椎尾法主の御高邁なる御知識と御高德を我身にうけたいと念願、今日まで欠かさず御聲咳に接することを法悦とした。そのお陰で私の如き浅学非才の凡人を共生会の常務理事にまで推挙下され、何かと御教導下されたことは、私卑生の光榮で生涯忘れることのできない御恩徳の賜である。

その内大僧正は第二次大戦後渡米され、二百余回にわたる人類の生きる道についてなどの大講演をなされ、御帰国後は二十二年頃、人間の授戒の要、また毎月の共生会の御説法、日本全国への御行脚などをなされた。斯かるうち八十余歳の頃、御両眼御失明の御災禍。然るにもかかわらず東奔西走して日本国家の、且世界人類のより良く生きるために、「ともに生き生かし合う」共生真理の御説法の御仏姿を拝するにあたり、殊にこの二ヶ年間にわたり、本年二月を終講とされた増上寺図書館内三康文化研究所における「宗教学の心理」およびその他数々のお説法には、実に耳新らしいものがある。

そして単的に仏教の真理を語り、いかに仏法が我々人間生活に直結して、欠くべからざる良き教であるかを、そしてインド釈迦の仏教は日本の共生仏教として、生き生かされ育ちつつあることを感受したのである。私は殆んど欠かさずもろさず聴聞うけることに努め、今その御高德の宏大なるに、感謝感激惜く能わざるものがあります。尚大日本仏教全書百巻が講談社よりの発刊は、法主最高の御歓喜であり、その御功績は世界史上賞讃すべき大事業の完成であると思ふ。

私はこの四月八日インド大聖釈迦の誕生日の前日の七日に、はからずも椎尾大僧正の御遷化を迎え、大聖お釈迦様と因縁浅からぬものありと感ぜられてなりません。その椎尾法主に法縁あった私は、せめて椎尾法主御説法の万分の一事なりとも、その法悦を世に実行にうつして、報恩の誠をいたさんことを念願してやなず、ここに御遷化の訃詞にかえんとするものであります。（念仏再拝）

——ご足跡——明治九年愛知県に生まれ、同三十八年東京帝国大学を卒業、その後名古屋建中寺住職、大本山清浄華院法主を歴任、昭和二十年より大本山増上寺法主。その間、完教大学教授、浄土宗教学部長、早稲田大学講師、東海中学校長、日本大学教授、大正大学教授、同校学長、衆議院議員などを歴任。



阿波介と耳四郎の発心 (9)

法然上人にはいろんな階層の人々が帰依をした。陰陽師の阿波介は代表的な人。占いや地相などをして伏見に住んでいたが、いつも酒と女におぼれて悪名が高かった。播磨のようとして道に迷ったとき、「現世の旅行でさえ案内が大切なのに、後世の大事はより大切」といって発心した。また当時の大盗賊といわれた耳四郎も、たまたま盗みに入った家の縁の下で上人の説法をきいて改心し、ともに上人を訪ねた。そして、どんな極悪人でも念仏すれば往生することができると聞き、ともに熱心な念仏行者になったという。



大原談義⁽¹⁰⁾

文治二年(一一八六)、浄土教に関心をもっていた天台宗の顕真は、いくら修行をしても疑問が晴れなかった。そこで大原の勝林院に法然上人を招き、直接浄土の教義を聞くことになった。当日はこの話を聞こうと南都北嶺の一流の学者のほか、数百人の人々が集った。そこで上人は「浄土の宗義・念仏の功德・弥陀の本願」のことなどをはっきりと説かれたので、顕真をはじめ、集った人々のだれ一人も疑うものがなく、喜びの涙を流して上人に帰依し、三日三夜にわたって高声の不断念仏が行われたと伝えられる。

松濤達文 絵
玉山成元 文

浄土歳時記

《さ つ き》



浅草西光院住職
二松学舎大学講師

若林 隆光

五月の武者人形がデパートの宣伝の具となりはて、鯉のぼりの緋鯉ま鯉がスモッグにあえぐ昨今に、今更浄土歳時記とは古い古いのお叱りもあるでしょうが、古々米の腹ふくるるわざ解消にはこのぐらいがよからうとの編集部の思召を有難くお受けした次第で、折にふれての問答などを連ねて責をふせごう魂胆。といって、とても木の芽あえの田楽ほどの味も香りものぞみはないので、せめて冷凍の初鯉ぐらいにいければまあまあと覚悟しております。先ずは《さつき》の巻。しばらくおつき合い頂ければ幸甚である。

☆ ☆ ☆

宗祖法然上人には幾つかの「問答」とよばれる書物があります。詳しい考証は専門家にお任せするとして、それらを読んで感じるのには、そこにあふれている生活に即した力強さと宗祖によせられている信頼の情です。頭髪を洗いなからお念仏をしてもよいでしょうかとか、極楽往生には結婚しても差支えないでしょうかとか、お魚を喰べるのは如何でしょうかという問いかけに、宗祖がにこにことし、しかしきつかりとしたお答えを与えておられる様子が眼に浮ぶように思えます。

永い問寺に住んでいるといろいろなおたずねがあります。右から左にお答えの出来ることあれば、考えてもいなかった質問にどうお答えしてよいか、反ってこちらがおききしたいようなこともままあります。いやそれどころかお答えしようとするたびに、わかっていっていると思っていたことが実は一つもわかっていなくて、ほんとにわかっていっていることはごくわずかだということを思い知らされるばかりです。自分でわかっていっていることは、自分の言葉で話せる筈だと思えます。でも自分の言葉で話すということは何とむずかしいことでしょう。宗祖が「魚を喰べるものが往生するなら鵜が往生するでしょう。魚を喰べないものが往生するならお猿ですよ。往生とは

魚を喰べるとか喰べないとかいうことで決定することではありません。お念仏を唱えるものが往生するのです」といったお答えをされているのを讀むと、宗祖の存在がいよいよ立派に見えて来ます。しかし易しくても、難しくても、私たちは間に答えなければなりません。自分の間であれ、他人の間であれ、問が出されるということは、常に人間にとって避けられない運命であり、問が無いということは、むしろ生けるしるしが少いということにもなるのではないのでしょうか。大分前置が長くなりましたが、一つの問を出してみましよう。皆さまもどうぞ一緒に答えてみて下さい。

☆ ☆ ☆

「極楽は十萬億土ときいていましたら他のお経には、『これを去ること遠からず』とあるそうですね。どちらが本当ですか」

どちらも本当です。

兎が住んでいるといわれていた月の世界へロケットで行けるようになった現代でも、極楽は無量のひろがりを持つ世界を十萬億もへだてた彼方にも似て、容易に到達出来ない国土です。若し仏さまの力（これが他力です）をかりることがなれば、理想の世界は常に無限の彼方にあつて、永遠に到着

することは出来ません。人間の智慧ではいつもあちらたてれば、こちらが立たずで、物が豊富になったら幸せかと思つていたら、忽ち公害におびやかされている日本の現状がそれをよく物語っています。千數百年も前に聖徳太子が「私を以て貴しとす」といわれ、誰も異存が無いのに、世界の一角では今日猶一日として砲声の絶えたことが無いのがその証拠といえましよう。

しかしそれでは極楽への到達は全く望みが無いのでしょうか。人間の力だけでは到達出来そうもない十萬億土の彼方の極楽も、考え方次第では掌をかえすよりも楽に到達出来るというのが、仏さまのお力、仏さまの教であり、宗祖の開かれた浄土宗の教です。つまり阿彌陀さまのお力によって、ナムアミダブツと唱えることによりそれは可能だというのが公式の答ですが、宗祖はその公式の答を可能にする方法として、誰でもが「なして」という心の入れかえをする極楽がここを去ること遠からずになれるといつておられます。一枚起請文にある「一文不知の愚鈍の身になしての「なして」です。出来にくいことですが試してみして下さい。遙か彼方、夢の世界だった極楽は忽ち隣のお家ほどに近付く筈です。前置きに氣をとられ、端折り過ぎたようですがでは又この次に。

インドでの

旅日記

Ⅱ ハイデラバードへⅡ

三月二日。オーランガバードから一度西部のボンベイへ戻り、飛行機を乗換え、再び内陸を今度は東南に向け出発。この旅行では最も南に位置するハイデラバードに到着したのは夜の八時十五分。現地に派遣されているエージェントの人であろうか、六十歳位のおだやかそうな人が出迎えていた。この人は何旅だろうか、欧州人のような感じのインド人である。ここでは一流のリッツホテルがとつてある。あの暑くて、蚊がいてねむれない夜のあとなので、エア・コンもきいて、きつとゆつくり休めることと期待していた。

暗くて分らないけれど大きな都市らしい。グルグルと道を



第十回

佐藤 治子

曲り、車の止ったホテルは灯りが煌々と、いやキラキラとあでやかな入口の照明。一歩足を踏み入れると、フロントにお客と応待の人も見えないし、ベアラに似たボーイが二人位しかいない狭いロビー。これは変だ。これが一流のリッツホテル？ 何だか連れ入み宿のような気配のする宿である。その老人からの説明で、シンさんがリッツがとれなかったと、不安げな顔の私達に話すが、日本からの案内人も、これは違う、どうして早く連絡がなかったかと、この人も全くこのことを知らなかった様子である。

シンさんは車の中で話されたのかも知れない。けれどベテシにかけられたように、皆ふんがいてしまった。宿泊料はリッツホテルへ泊るべく支払ってあるのにとれませんでした

△町はずれで見た踊り子▽



と、今頃その土地へ来て、連れ込み宿のような所へ連れて来られた私達はおさまらない。こんなことをすれば、インドのエージェントの信用がたおちである。

せまい食堂のテーブルについたものの、何かの間違いかも知れぬと、私達は「さあ頂きましょう」とい

う気分になれない。シンさんはその老人を連れて来て入った。そして「奥さん、英語でこの人と話して下さい」とたのみこむ。シンさんは両方に疑われたくないのだろう。自分の通訳をさせて、お客に直接話し合うやり方をとったのだ。

日本人をみくびったことは大いに詰問すべきである。場合

によっては、おとなしくニコニコして何でもいう通りになっていることはよしとせずで、私は「一体どういうわけか」「どうしてここへ来るまでそのことを一つも話さなかったか？ エージェントの人ですら知らないのは何故か？」「この支払いと、リッツホテルへ支払った分との差額はどうなるのか」等々、代表質問の形をとった。まさを日本のお客に問いつめられようとは思わなかったであらうし、先生達はだまっ

て、きちんと腰かけている様子に、シンさんも顔は青ざめているし、この老人はひたあやまりするばかり。

そういえば、ボンベイでも部屋が不足していたし、オーラシガバードでも聞いたよりは次のクラスの宿であった。私達は費用だけ支払い、ひどい宿屋へ入れられたらしいことが、ここで分った気がし始めた。これはこの人の責任ではない。責任はニューデリーにある現地エージェントの本社がもつべきである。お土産買いに夢中になる日本人のことは、行儀作法にまで及び、評判はおちる一方と新聞で読んでいたが、商魂たくましいインドのエージェントにしてやられた宗教家の私達のグループ。明日は往復百八十里（三百キロ）のドライブをしなくてはならない私達。いずれにしろ早くねなくてはと、「みくびられ問題」はそれまでとして、居心地の

わるい部屋へ戻った。

Ⅱ ナーガルジュナコンダへⅡ

三日、七時起床。八時朝食。八時四十分ホテルを出発。車が市内を走っていくと、中々の大都市で、立派な回教の寺院も見えるし、商店街のかざりつけもよいし、往来する人も多い。橋もヨーロッパ風の堂々たるものである。通っている人達も活気がある。車は野菜を一杯つんだ車とすれちがったり、人の多い下町を過ぎて行く。

やがて町を出ると、その辺はブドウ畑。ブドウ棚がずうっと見渡せる。さて、これから九〇マイル走らなくてはならない。ゆっくりと移り変わる景色を見ていかななくては。ここもデカン高原なのだ。

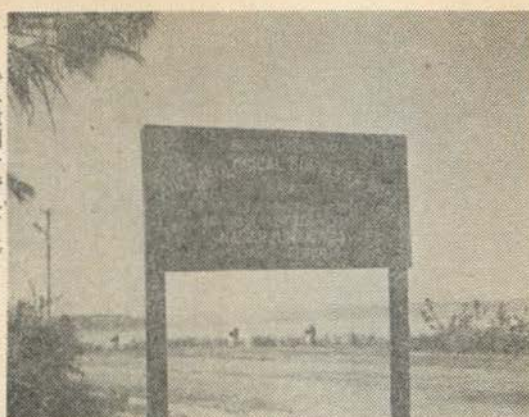
田園は真青な稲田で、実に美しい。今までの岩石地帯と違い、私は目のさめるような青田に目を見はる。道ばたを歩いている女達は赤いサリーに、何と首かざり、腕輪、鼻にまで金風製のをさげている。ゴテゴテと、まるでありったけのものをつけているようだ。重くないかしら。背も割合と高いいし、目つきは一体にするどい。シルクロードでよく見かけたウズベックの人達は、親しみのもてる顔であったが、この

辺りの土着の人々は近よりがたいするどさである。

岩石地帯にかかり始めた。半ば走った頃であらうか、村から村への十字路を通った時、村の人達が集まって、何か見ている。女の子が踊っているという。私達も降りてかけよつた。お金を出すと、やせた十三歳の女の子は、私達の方に向って踊り出した。黒い顔に白粉をぬりたてている。かわいそうな位一生懸命踊ってくれる。ジブシーのように村から村へと渡り歩くのだろう。一休みして、また車は走り出す。行けども行けども目的地らしき所は、未だ見えない。車はガタガタと、ますます悪い道へと入る。丘の向うにちらと湖水らしきものが見え出した。丘を上りきって平地に出ると、その向うが湖だ。やれやれようやく来たらしい。湖水を右に、車はダムの上の崖下の径を回り、博物館の見学許可をとり事務所の前で止まる。

門のわきのブーゲンビリヤが美しい。中々手間がとれる。そつと事務所をのぞくと、シンさんは一生懸命何かいっている。どうももめているらしい。「御手洗い拝借」を口実にそばを通ると、二人の役人のうちの一人が休日を理由に、どうしても島の博物館は開けられぬといはっていることがわかった。ここを調査に团长としていらした京都大学の長尾先生

と親しい主人の、がっかりすることを想像していたところ、かえって仕方ないと、一番にあきらめたそぶりを見せ、ささと車へ戻ってしまった。ここまではシンさんも来たことがないらしい。連絡をとっておいと、はり切っていたシンさんのしょげぶりは気の毒な位である。またしてもエージェン



△人造湖を背景に▽

トの手ぬかりであつたらうか。

せめて島を遠見できる所まで行くのであるうか、車はガタガタ径を走り出す。赤ちゃけた岩石地帯に一米位の砂の山がある。何だらうか。

また一つ。それは蟻塚であるといふ。デカン高原の南に米てみつけた大きな蟻塚。車は

右の細い道を曲って下って行く。暫く行くと、舟着き場についた。ここまで来ると、残念さで美しさが一層こたえだした。

Ⅱ ナーガルジュナコンダ Ⅱ

舟着き場への径の途中、左右に礎石の残っている遺跡があった。そしてその舟着き場から引き返す時、車を止めて皆降り立ったが、二三歩歩き出した私はやつつくような暑さにクラクラしそうで、急いで車へ入りこんでしまった。ダム建設の時、この辺りの丘は水中に埋没されず残されたにちがいない。知らずして来た私達ではあるが、こういう丘の遺跡があるなら、あの事務所の人はなぜこれを教えてくれなかったのであらうか、薄情な人達!

遺跡を歩いている先生達は奥へ奥へと行かれて、中々戻って来られない。

四十分もたつたらうか「ああよかった。学堂もあったよ。音楽堂もあった。尼僧院の跡もあったよ。ここに竜樹菩薩がいらしたのだからね」と、満足気に顔をほらせて帰って来た主人。八宗の祖として大乘仏教哲学の基礎をきずかれた、竜樹菩薩の遺跡の一部に足を踏み入れることができた先生達

は、遙々ここまで来た甲斐があったと、暑さなど忘れての感激に浸るのも当然である。大乗仏教と口にうたってはいたものの、遺跡に来て認識をあらたにさせていただけた私である。このコースはどうしても入れるようにと、エージェントに申し入れたことだし、案内のシンさんもおかげさまで喜んでゐる。このダム建設のために遺跡の主なるものは発掘され、島に博物館を建て保存されているということである。その調査にあたられたのが京大の長尾先生を団長とする、調査団の一行であったのだ。

湖を一望にできるレストハウスで休憩し、おひるをすまして、三時四十分レストハウスを出発。あの遺跡の近くでみたという、大きなサボテンの話をしたり、あの蟻塚の写真を撮りたいなと思っているうちに、車はガタゆれになるし、暑さにうだったことなどの話題をもち帰る私達は、今日でお別れの暮れていくデカン高原を北へ北へ。ホテルへついたのは、七時頃だったであらうか。

八時夕食。「こんなにやけた」と、手や腕をさすって喜んで眺めている主人。あの丘にのこっている遺跡を歩いた感激は、忘れられないものとなった。

四日。七時起床。朝食の後、荷物をまとめホテルを出発。

塗物工場や鋳物工場を見学。

サラジャン博物館へ行く。サリーを着た女性の案内者のあとへついて、一室々々を見学。ここの王様が結婚もしないで、世界中の美術品を蒐集したものを展示してあるという。子供のおもちゃを集めた一室へ入ると「貴女のお国のお人形です」と、藤娘だったと思うが、わざわざそこへ私達をつれて行く。十二時半にホテルへ戻り昼食。三時、問題のホテルを出発し、デリーへのジェットの直行便へ乗るべく空港へ。

飛行機の中で会った人

四時二十五分発。私のとなりに品のよい青年が腰かけていた。シーク族で背広を着ているが、ターバンをまいている。暫くして「貴女方は仏跡巡拝団ですね。ナーガルジュナコндаへいらしたのでしょうか」と、話しかけられたことから、博物館へ行けなかったことを話した。この人は目を丸くして、「遙々日本から来てくれた、しかも仏教の先生達に？」と心の底からおどろき、残念がってくれる。そして「何故交渉してなかったのだろうか、ニューデリーのエージェントから博物館に宛て、これはいつてやらないといけません」と、この人のせいでもないのに、気の毒がると同時に非常に残念

がってくれる。私はこの人の真心のある人柄に打たれてしまった。

ニューデリーも近いらしい。徐々に下降している飛行機から、郊外の家々が見えだした時「奥さん、あの建物ね。あれは私の卒業した大学です」と、窓の右側を私にのぞかせて指すのである。二時間の間、この人は態度もくずさず、私達のことを心から「残念でした」と、自分のことのように口惜しがってくれた。一人の人の態度で悪い印象もよくなるし、ずるいことをしたりすると大抵がそうだろうと思われるし、まう。立派なシーク人に偶然となりあわせて、私達は心が和む思いであった。

Ⅱ 日 航 機 Ⅱ

五日。いよいよニューデリーを出発の時間もせまる。まだ暗い四時三十分、ホテルを出発、暁の空港へ。今日は日航機へ乗るのだ。この便の席がとれないとあわてたエージェントからのたのみで、出発前東京で日航の知人にたのみこんだことを思い出す。いよいよ搭乗という時、日航の空港にいる人達が並んで出発便を見送っている中に、あの草履ばきで気軽にホテルへ来てくださった方も、ユニホーム姿でニコニコと

見送って下さっている。感激をこめて手を振って乗りこむ。なつかしい日航機よ。何かホッとする。なるほどこの日、一便しかないというだけあって、殆んど一杯である。

バンコクへと向う飛行機はゆるやかにデリー空港の上空を大きく旋回し、東南へと向う。十五分ぐらいたったであろいか、左手の彼方に雪のヒマラヤが見えてきた。ヒマラヤ、ヒマラヤ、と窓に顔を押しつけて見ている。いよいよインドとお別れだ。

そしてバンコクからカンボジアへ。あの眠れる森林の中の遺跡、アンコールワットとトムを見学する、も一つの目的が残されている。私達がアンコールワットを見学した十日後に、あの動乱が起ることなど、予期もできなかったあのカンボジアへ。

スチュワデスがおしほりをくばりだした。二十日間のインド四大聖地と仏蹟巡拝も終わったのだ。日航機のせいであろうか、何だか気がゆるんでしまったようだ。

Ⅱ インド旅行記終 Ⅱ



高橋良和

法然堂への道

比叡山の東塔の根本中道の前の道を通って、延暦寺会館の前を更に下ると、そこに法然堂というお堂がある。

小さなお堂であるが、その昔法然上人得度の旧蹟である。比叡山における法然上人の遺蹟は二つあって、その一つは西塔黒谷の青竜寺で上人隠遁のところであるし、この法然堂はその昔、法然上人の幼時勢至丸がはじめて比叡山に登って、持宝房源光のもとに入って出家したところとつたえられている。

然し事實はこの持宝房源光は、西塔北谷に居たのであるから、この法然堂が得度の遺蹟であるとする、多少辻褄の合わないところである。

というのは源光は西塔の人であり、東塔の人でないことである。そうなってくると、比叡山で最初に訪ねたのは源光のものであるか。

われはこれ魯鈍の浅才なり、碩学について、円宗の奥義をきはめしめん。

ということ、皇円のもとに入室させたということであるから、むしろ皇円が東塔所屬の人であったとみるほうが、法然堂のあることを理解するのにはよいと思うのである。

この皇円のいたところは、比叡山の中心である東塔西谷であって、東塔のなかでは、西塔に一ばん近いところである。

するとこの法然堂が東塔であるということからして、十五歳に登山した法然上人が、一応このお堂に入ったことも想像されるし、それとともに、法然上人が十八歳で西塔の黒谷青竜寺に隠遁するについての思想的な流れのなかに、この皇円の人柄の反影があるとみられる点があることである。

皇円は非常に内省的な求道者であつたらしい。皇円は扶桑略記三十巻を著述しているが、扶桑略記は、僧伝や、縁起を集めたものであつて大部の著述である。

そればかりではない。弥勒の下生のときに会いたいということから、遠江の国の桜池に身を投じて蛇身となろうと考えた。というのは蛇身になればいのちが長らえるという伝説が

あるので、最後臨終のときには、この桜池の水をもらい
け、掌のなかに入れて死んだといわれている。

それほど永道の心深く、法然上人に、天台大師の法華玄
義、法華文句、摩訶止観、などの書物を読ましめたのはこの
皇円であつたと思われる。

四十八巻伝にも、

たとひ隠遁の志ありとも、まづ六十巻を読んでのち、その
本意を遂ぐべし。

とすすめているから、法然上人のいのちがけの勉強のかけ
には、皇円の人格の影響が多分にみられるとみてよい。

そういったことで、この法然堂は、十八歳で西塔の黒谷に
隠遁までの三年間、法然上人が滞在したところとみるなら、
比叡山上における遺蹟としては、また非常に本宗に關係が深
いところである。

然しこの法然堂は、比叡山延暦寺の所有するお堂である
が、管理は浄土宗西山派がやっている。詳しくは西山三派で
ある。近年修理が出来た小じんまりしたお堂で、いつも念仏
の声のするところである。黒谷の青竜寺には本宗の關係者が
最近どんどんお参りにゆくが、この法然堂へはあまり訪ねる
人もない。少年時代の法然上人の居たところとして、今後機
会あればこのお堂にも足をのばして欲しいと思う。

ところで法然上人が、比叡山に登ってから、十八歳で西塔
黒谷の慈昭房寂空のもとで、法然房源空と名を改めたといわ
れているが、十五歳で比叡山に登山してから、十八歳までの
間、一休上人の名前はなんと呼んでいたのであらうか、とい
う疑問をもったものである。十五歳で登山するまでは、生れ
ながらの勢至丸という名であつたが、久安三年皇円のもとに
入室し、その年の十一月八日に髪をおとして、大乘戒をうけ
ていることが四十八巻伝に記されている。そのように僧侶に
なつたのに、なお勢至丸と呼んだのかどうか、それについて
の疑問を私はもちつづけていたのであつた。

ところがはからずも十巻伝という法然上人の伝記をみると
生年十五歳出家登壇、受戒、其名円名房善弘付給
とある。

この名がある限り、法然上人はつきりと天台の僧侶であ
る。すると、黒谷隠遁までの三カ年間、法然上人が山上で住
居したのが、この法然堂とみることが出来る。

この円名房善弘の名が信ぜられないような寂空の名であつ
てもよい。私の心のなかには、比叡山上における上人の三年
間のブランクを埋めてくれるうれしい名である。

少なくとも私たちは、信仰として法然上人の比叡山上にお
ける修行場としてこの法然堂に心をふりむけたいものである

特集

青年と仏教

《第一回》

その 1



法然上人の目指された人間像

香川 孝雄

(仏教大学教授)

先年、中央教育審議会より「期待される人間像」の答申がなされたが、そので一部、第一項には次のように現代文明の特色と人間性の向上について力説している。

「現代文明の一つの特色は自然科学のぼっ

興にある。これは現代文明のすぐれた点であるが、産業技術の発達は、人間性の向上をとまなわなければならない。もしその面が欠けるならば、現代文明は跛行的となり、人間が機械化され、手段化される危険も生ずる。ここから人間性の向上と人間能力の開発という第一の要請が現れる。」

最近における自然科学の進歩と機械文明の

発達は、まことに目を見はるものがあり、それによって、われわれ人類の生活は多くの恩恵を受けている。今日においては、もはや自然科学や機械文明なしでは一日の生活とても考えられない。そういう意味で、それらが人類に便利さを与えていることは事実である。けれども、そればかりでは人類に幸福をもたらすものとは云えない。文明の発達のために

交通地獄、公害病、ノイローゼなどの新らしい不幸が発生して来ており、たしかに現代日本における一つの大きな問題点となっている。たとえば交通地獄を例にあげて見るに、東海道五十三次を籠に乗って旅していた江戸時代では交通地獄というものは思いも寄らなかったであろう。現代における自動車の発達と普及は、驚異的であり、今日の交通機械は自動車を抜いては考えられないが、一旦運転を誤まれば、まさに死を意味することともなる。その多くは交通法規を無視した無謀な運転によるものであるが、自動車の性能の向上に対してそれを運転する人間の心が向上していないために悲惨な事故を起し、本人ばかりではなく、家族にまで不幸のどん底につき落ちることとなる。「期待される人間像」は実にその点を指摘しているのであり、人間性の向上が強調さるるゆえんである。



過去二千五百年の仏教史は、理想的人間像への道を追求し続けて来たと云っても過言で

はないと思う。仏教の目標が「八さとり」にあらんと云われるが、その「八さとり」は、世の中の根本道理に目覚めることであり、それに目覚めた人を「八覚者」または「八仏陀」と称するので、そういう人格を理想としていた。けれども道理としては理解できても、そこに到ることは至難のわざであり、その道について仏弟子をはじめ、各宗の祖師方も色々と苦勞して、独自の方法をあみ出され、そこに同じ仏教でありながら、今日のような多くの宗派が分れ出たのである。学問をして真理をさとらんとする者、苦行をしてさとらんとする者、座禪を組んで無我の境地を体得せんとする立場などがそれで、法然上人は、そのような行は愚鈍の凡夫にはできないことであるから、誰にでも、いつでもできる念仏の教えを採用されたのである。したがって法然上人の人間形式は口称の念仏によるものと受けとることができるのである。



法然上人は青年時代、当時の最高学府とも

云うべき比叡山で研究、求道の生活を送られたが、上人の学識は他にぬきんでいて、周囲からは「智慧第一の法然房」と称された。やがて比叡山には、自分の学問的、求道的欲求を充てくれる先生がいないことを知るや上人は山を下り、奈良や各地の学匠を訪ねられたが、そこでも満足できず、一人現在の元黒谷、青竜寺のあるところの報恩蔵にこもって一切経を繰り返し繰り返し熟読し、研究された。そのような学者でありながら、みずからは「十惡の法然房、愚癡の法然房」と口ぐせのように云っておられたと伝えられるが、この言葉は、決してみずからへり下って遠慮した言葉ではなく、自分を見つめれば見つめるほどに、わが身の愚かさ、罪深さ、無力さというものを自覚せられた実感として私は受け取るのである。昔から「稔った稲は頭を下げる」と云う諺があるように、人間として内容のある人ほど謙虚な態度をとるのは、このように自らを反省し、自分の限界をさとっている結果であろう。上人は『十二箇条問答』の中で、「智慧の燈で煩惱のやみをはらうことは、愚癡の身には罪を造ること

のかさなることはあっても、罪を消すことはできない。ただ仏のお言葉を信じて疑いなければ、仏の力によって往生することができると教えられている。このように自らの愚かさを自覚し、仏を信ずることを「深心」と云って念仏者の基本的な姿とされているのである。

＜四＞

右の「深心」を具足した態度は、法然上人がしばしば強調され、ご自身でもその心で生活されていたことが伝記などを見るとよくわかるのであるが、上人は理想的な人間像を別の面から観察して「至誠心」をあげておられる。すなわち人間像を四通りに分けて、

- 一、外相は貴げにて、内心は貴からぬ人、
 - 二、外相も内心も、ともに貴からぬ人、
 - 三、外相は貴げもなく、内心は貴き人、
 - 四、外相も内心も、ともに貴き人、
- とし、この中、最初の二人は虚仮の人であって、いまきらうところである。後の二人こそが至誠心を具えた人で、これを真実の行者と

名付けるのであると『御消息』に述べておられる。つまり外相はどんなに貧しくと、内心の貴い人間像を理想とされたことが、よくわかると思う。

以上の「至誠心」といい「深心」と呼ぶ心は別の心ではない。深心を具えれば至誠心は自ら具足し、至誠心を得れば自ら深心を得ると考えられるが、さらに右二心を得れば、他を利益せねば勿体ない、あいすまいという責任感が湧き出てくる。これが「廻向発願心」と呼ばれるところの心である。この三者は一心であるが、見方によって三つの名があるので、この心を具えた人間像が法然上人の理想像であったと考えるのである。

＜五＞

ところで、愚鈍なわれわれ凡夫は、その三心を自分の力で得ることはできないであろう。自力で得られるとするのは自力門の立場であるから、法然上人の他力門の立場では、それを念仏するうちにおのずから授かる心であると理解される。したがって「観念の念に

もあらず。念の心をさとりて申す念仏にもあらず。ただ一向に念仏すべし」とさとされているのである。科学万能の世界に生活するわれわれ現代人は、何事も理窟で理解しようとし、理窟に合わないものは信じようとしない。けれどもその理窟が浅薄であって、目のことのみにとらわれてはいないであろうか。たとえば人間は自分一人の力で生きていると考えている人が多いだろうが、それは全く浅はかな考えで、親、兄弟、先生、友人は勿論、広く外会の縁、宇宙大自然の力によって生かされていることに目覚るべきである。先般アポロ十三号が一寸した機械の故障によって、宇宙飛行士たちは命からがら帰って来た。一旦大気圏外へ出てはじめて、生きることのむづかしさを知り、生かされていることの有難さをかみしめたことであろう。そのように生かされていることに感謝し、真実の心をもって生き、外会に対して報恩行に徹する心が、三心と云われ、その心を持つ念仏者を法然上人は理想像とされたのである。そのような人間像は、まことに現代においてこそ必要であり、外会の待望する人間像であろう。



諸調査からみての

現代の青年層を考える

江東区教育委員会
社会教育主事 恩 田 大 進

どこの地区でも同じように実施していると思われるが、本区においても例年成人式を挙行し、毎回二、八〇〇名前後の参加をみているが、昭和四十三年度から参加者の負担にならない程度の内容で「二十歳の意識」を知る調査を実施してきた。この意識調査や、青年活動記録、婚前者教養学級生調査等の集計資料の一部を提示し、現代の青年の一面を紹介してみたいと思う。

参考までに、本区成人式参加者中調査用紙提出者の三年間の出身地をあげると表1のような結果になる。

表2にあるように流入状況が成人式を迎える五年前いわゆる中学卒業期から急激に増加

していることがしれよう。一方青年活動参加者の感想文等によると、その多くの青年が孤独であり、都会の谷間に埋れていることが知らされるが、その事実をよく表わしているのが表である。

彼等青年の多くは、何等かの機会があれば所属する職域から離れた友と語り、あるいは何ものかを求めたい欲求が強いことが知れよう。なお解答中「わからない」と答えた者の半数以上は、日時等の都合がつくならば参加したいという意志表示をしている点を付記しておきたい。

次に彼等は将来の指針をどんな点においているかであるが、実に着実な考え方、とらえ

方で毎日の生活に仕事に努力していることが知れるのである。表4の「これからの生き方」についての調査結果表がそれである。

男性側は「専門分野での努力」「自分なりの努力」「個人としての練磨」等の項目が上位を示し、女性側では「家庭づくり」が他を大きくはなしている項目で、他は男性と大差ない結果を示しているが、これから考えられることは、現在とかく叫ばれている事実とあらはらの彼等青年の姿が知れるのではなからうか。かえって従前の一つの方向への強制化された様な時代の「個」より、とめどもなく流れる現世の中で作りあげている「個」の姿こそ強じんなものであるようにさえ思える

◇調査紙提出者出身地方別表

(表1)

	江東区	都 内	関 東 地 方	東 北 地 方 (北 海 道)	中 部 地 方	近 畿 地 方	中 国 地 方	四 国 地 方	九 州 地 方 (沖 縄 道)	参加者/ 提出者
昭和43 年度	% 28.3	% 12.6	% 17.0	% 18.7	% 12.6	% 1.2	% 1.4	% 0.8	% 6.5	2,653 / 1,024名
44	32.4	11.2	13.1	21.5	12.1	1.7	1.7	1.1	5.2	2,989 / 1,563名
45	37.9	8.7	11.1	21.9	10.8	2.0	1.0	1.2	5.9	2,713 / 1,132名

◇成人式までの流入状況

(表2)

(中卒期)				(高卒期)				アンケート 提出人数
	6年前	5年前	4年前	3年前	2年前	1年前	6年間 合計値	
昭和 44年	<38年> 3.2%	<39> 8.6	<40> 2.9	<41> 6.3	<42> 13.7	<43> 10.1	44.8%	1,024名
45	<39年> 2.1%	<40> 8.9	<41> 3.2	<42> 5.1	<43> 15.0	<44> 9.2	43.5%	1,563名
46	<40年> 4.9	<41> 7.3	<42> 3.1	<43> 7.2	<44> 13.2	<45> 8.7	45.1%	1,132名

◇学習会、話し合い等の会合の開設への参加意向

(表3)

	S 45	S 46	
	計	計	女
参 加 し た い	43.6%	43.2%	45.8%
参 加 し た く な い	11.5	9.8	12.2
わ か ら な い	35.1	36.9	32.8
			41.1

のである。しかしここで考えなければならぬことは、互いに若さをぶつけあう、素朴なふれあいの場がないということである。これなどは表に示した数で明白ではなからうか。

また反面世相の反映の事実というか、平和な時代反映の結果からなのか、この生き方の調査項目中、男性側に「明るい家庭づくり」を示す数値が意外に多く示され、昨年より今年と若干ではあるが上昇し、第二目標にまで多くの数値が示された点などは、核家族化の影響なのか、ふるさとを離れて寮なり間借りの生活からのささやかな抵抗なのか、その理由は明らかでないが、戦中、戦前期の青年層にはみられなかった一面ではなからうか。

種々特異性はあろうが彼等青年は、マスコミ文化が喧騒されているような面ばかりではなく、綿々として流れる日本人的生活感情、意識が脈うち、将来の自分という姿を精一杯見つめようとする姿がうかがわれる。が、しわし若者の共通な面としての性急さからくる焦慮感、さては、成就、独立の要求からの面で生ずる条件に対する不満、不審、それによる心理的变化はまぬがれない。とくに現代の

ごとく猫の目のように変化していく世相においては、彼等を埋没していくには容易なことである。これなどに対する意識として表3に示した数値は物語ってくれよう。五人より十人の同年輩階級でのサークルなりグループ化での学習なり、集団による会合を望む面がそれであろう。

さらに彼等が読んだ図書の中で、自分なりに感動し他に推薦したいと思われる書名をあげてもらった結果、(これは本年度が最初)成人式を迎える青年

◇これからの生き方についての調査結果

(表4)

		男 子				女 子			
		第1目標		第2目標		第1目標		第2目標	
		S45	S46	S45	S46	S45	S46	S45	S46
1	教養豊かな家庭をつくること	2.5	3.5	3.4	3.3	7.0	5.7	4.2	4.6
2	専門分野で一流になること	17.6	16.5	7.6	7.9	2.0	3.6	2.4	2.4
3	世のため人のために尽くすこと	3.5	3.9	3.9	3.9	1.9	3.4	2.3	2.2
4	金持ちになること	2.3	2.4	2.4	3.2	0.5	0.6	0.4	1.9
5	出世する(高い地位につく)こと	2.5	1.6	1.0	2.3	0.2	0.6		
6	社会の指導者となること	2.1	2.9	2.1	2.1	0.4	0.6	0.5	1.1
7	有名になること	0.4	1.1	0.4				0.1	
8	まじめに自分なりの努力をすること	20.5	19.7	16.0	16.4	19.7	23.6	25.5	25.1
9	明るい家庭をつくること	10.8	14.8	21.0	18.9	31.5	37.1	23.3	28.9
10	個人として社派な人間になること	14.9	15.1	12.5	14.8	14.0	12.9	11.6	16.5
11	生活を楽しむこと	5.8	7.5	9.2	12.9	5.4	5.7	9.5	9.7
12	仕事にうちこむこと	3.9	3.5	5.0	7.1	0.9	0.8	2.3	2.4

◇感動した本、他に推せんしたい本

＜女 性＞ (表6)
477名中141名 (29.6%)

9人 誰の為に愛するか
7人 橋のない川
" 風と共に去りぬ
6人 大地
" 心
5人 人間革命
4人 ジェン・エアー
" モーバーサン女の一生
3人 ジャン・クリフトフ
" 嵐ヶ丘
" 車輪の下
" 人間の墜情
" 友
" 冬の旅
" 知と愛
" 宮本武蔵
" キュリー夫人
" 破戒
" 泥にまみれて

※このほか

親鸞
道(高田好胤)

等各1冊あてあげられた
ものの67冊ある。

＜男 性＞ (表5)
655名中154名 (23%)

6人 私の人生活感
4人 道をひらく
" 友情
" 人間革命
" 大地
3人 老人と海
" 竜馬がゆく
" ジャン・クリフトフ
" 人間の条件
" 冬の旅
" 坊ちゃん
2人 宮本武蔵
" 二十四の瞳
" 人を動かす
" 人間の運命
" さび
" 罪と罰
" 武器よさらば
" 三国志
" 道あり
" 人間失格
" 私の随想

※このほか

科学と宗教
古寺巡礼
心(高田好胤)

原始仏教の思想と生活等
111名が各1冊をあげて
いる。

は、青年心理学上青年後期にあたるわけで、推薦された書名を通覧するに、あたかもこの期を思わせるような通俗文学といわれる作品名、純文学・思想書・宗教書が、その多くを示していた。しかし三割程度ではあったが、青年前期に多くみられる特徴としての伝記歴

史書・空想物語・友情をテーマにした物語があったことは、現代青年の読書意識なり読書傾向として今後に課せられた問題であろう。次に示す表5、6はその一部を示した表である。これは全体のわずかに三〇%(男女とも)満たないという点客観性はないが、前述のよ

うな傾向面ともう一面読書しなくなったといえる点かも知れないが、わずかではあるがあげられた書名の中の思想書・宗教書の多くは、人生いかに生くべきかの書名に集中されているといっても過言ではない。これなどは客観的な自我意識の完成期にあたり、その

◇尊敬する人・理想の人は＜男性＞

(表 7)

[illegible]

特徴としての精神生活の充実への欲求の表れでもあると同時に・現世相・思潮の矛盾への抵抗でもあると考えられるのではなからうか。

次に「尊敬する人・理想の人」と題しての精神的背景を知らんがための集計を示す図であるが、

(表7、8) まず第一点として、素直にそれぞれに該当する人物名をあげてくれた青年が提出者の四分の一の男性側で約二七％、女性側で約二一％であったこと。これにおいては各面から種々論じらるる点があろうが、

ここでは避けることにするが、あえていうならば現代青年・少年層の良さではなからうか。第二として男女性それぞれ氏名をあげた中で、父と答え、母と、両親と答えた数をあわせると、全体の四分の一の解答数中の四分の一の数に該当することである。最近の流行語のようによく耳にする「親子の断絶時代」これは何かマスコミのために作られた言語のような感さえるわけである。

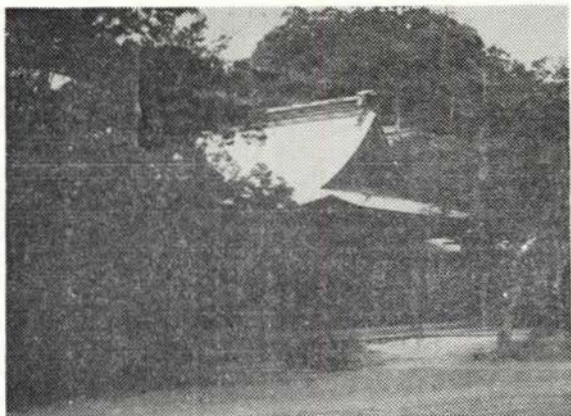
都区内各區で青年グループ交換会、青年との座談会等によくよばれて話し合いに参加させてもらう機会があるが、そのいくつかの会合で聞かれることはに「親は新しい時代をよく知っているかのように、子には世話にならないよ……」というような近代ぶるが、決してわれわれはそんなことを考えていないのだ。世話したい気持ちでいるのだから、なぜ一言、頼むといってくれないのか。」

これなども考えるべき事であらう。

以上二、三の面から現代の青年の姿の一端を紹介してきたわけであるが、要するに今青年が待ち望んでいることは、ある一種の心の柱え、精神面の充実である。もちろんこの精

浄土宗の

古刹を訪ねて



《大本山光明寺開山堂》

今回からは「法然上人像シリーズ」に替つて「浄土宗の古刹を訪ねて」と題して、浄土宗の由緒寺院を歴訪し皆様に寺の由緒やエピソードを紹介してみたい。

まず本シリーズのトップをかざる寺院は関東浄土宗寺院の中で、もつとも古い伝統と高い格式をもつ鎌倉光明寺である。光明寺は三号を天照山蓮華院光明寺といい、浄土宗の大本山である。光明寺は鎌倉時代に然阿良忠上人を開山とし、北条一門の大仏朝直を開基として建立された寺院である。それ以降室町・江戸時代を通して関東浄土宗寺院の中心として栄えている。尚、光明寺は長年鎌倉材木座の海岸に静かなたたずまいを構えていたが、近年破損が著しく現在鋭意修復中である心ある皆様方には昔月の光明寺の姿を再現すべく御協力を願いたいものである。

この写真は光明寺の中心であり、三祖然阿良忠上人ゆかりの開山堂である。良忠上人は弘安十年（一二八七）八十九歳でなくなつて、関東を中心に浄土宗の教義の弘通に専念された。この良忠上人の活躍が今日の関東浄土宗

教団の基盤をきずいたといつても過言ではない。そのため良忠上人は法然上人、二祖聖光上人の跡をうけて浄土宗第三祖として高くあがめられている。

開山良忠上人は遠く鎮西の地で二祖聖光上人に学んだ後、関東に帰り、はじめ下総で千葉一族の荒見弥四郎や椎名八郎等と交渉をもつたが、その後鎌倉に入り、大仏勸進聖浄光などの仲介により当時の権力者北条一族の大仏朝直の帰依をうけ、佐介谷に悟真寺を建立した。この悟真寺が基盤となり蓮華寺となり更に光明寺と寺号を改めたものと思われる。光明寺と改称した時期については明確ではないが、明応年間、中興観音祐宗の頃にはすでに光明寺と号していた。

寺域の変動はあるが、この光明寺の開山堂が関東浄土宗寺院の起点であることには変りない。現代の混乱した世相を思うにつけ未知の東国に敢然と布教を志された良忠上人の勇気を思い起さずにはいられない。

（宇高良哲）

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

碩学
の名著

『浄土宗読本』 覆刻版

価 1000 円

〒 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

浄土トラクト

新刊

『浄土宗のおつとめ』 村瀬秀雄著

B 6 判 本文16頁

価 50 円

百部以上 45 円

〒 25 円

竹 中 信 常 著

新刊

『選択集に聞く』

B 5 判・308頁

価1000円・〒150円

発行所 教育新潮社

著者長年の選択本願念仏集の研究・既刊の解説書の集大成、選択集を現代に贈る平易な文面、浄土宗徒必携の好書。

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土

五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十六年四月二十五日印刷

昭和四十六年五月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二二八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和四十六年四月二十五日印刷
昭和四十六年五月一日発行

浄土

第三十七卷

第五号

定価金九十円

(送料六円)